

小兒必用養育草

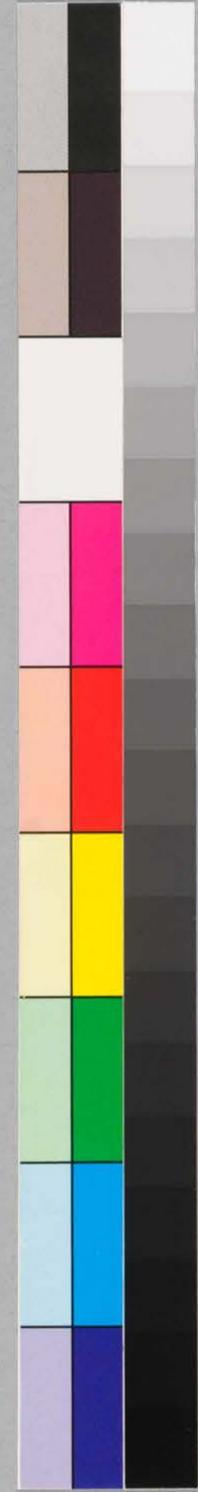
乙徳田年序刊

香月啓益纂



補
小思西園記 一

二九〇三



序

曾太天單者何書名也。曷為書。所以
養育小兒之書也。著者誰著者。
我。牛山先生也。先生自弱冠
潛心仁術。而造其闢奧。嘗事于
中津侯。有年矣。今也解纆。來寓于

京為人治病。名振。禁下。其所編錄。書凡若干。咸有幼於斯。民大矣。鄉向在豐州。著婦人古登布。幾草。行于世。又且欲編老人也。之奈比草。是隨其信。而為之治也。古昔扁鵲。過邯鄲。聞貴婦人。中為帶下。醫巫。

過洛陽。聞國人愛老人。中為耳。自痺。醫者來。入咸陽。聞秦人愛小兒。中為小兒醫。先生負若人之流。巫步歟。寶永戊子。京師火。其藏版。曾太天草。亦燒。亡。馬頌書。肆某氏。清利。蓋古。雪使。幼。

備六卷中一則此書不可一日
無也既而先生為之增補加
藥方壽諸梓書以垂不朽云

正德甲午春三月越中富山醫塾生

杏三折謹識



小兒養育草序

いみじくも聖人氏小六の養と教へ給ふ
慈幼もよく流ひより不定の給へ世人
あんどわりの中華の書も乳母は
ゆより表帛成服せられ教へる
何れハキもばとさわいのきすぐー
愛著少いとき姑息成はる兒
しや漸く長がりて懦弱
仰ひて父母小は子より教へる
俯一

妻子に養ふことと人の徳不慈不孝と憐ま
 しくんや予の家弟貞庵啓益ハ幼少の監と學で
 おあつた理まの巻に京師小負の友に東武一
 とくく終小の清道乃功なりぬ中あは
 中津侯小笠原君小はして侍監と持て
 いゆハ辞して平安城へ河をひ市にゆくは
 くはく中山翁とよ吐納のいゆ世人は慈幼
 小あつたるはくこと成患ハはくを人小くは
 小兒養育草やながり婦人愚夫のよてわと

ひくくくも勢よとて故國なる家族小あす 僕
 此れ書によむに初生よれ養育や痘疹乃とこ
 よび十歳ゆでれ教誨はまはらうにまをりあ
 乃あはれまはくく古人小兒成芽兒といひま
 嫩葉嬌花といひ草木乃初て萌出花は初
 めくくあつたるにまはくくをまはくくはく
 名もよつてま清名小とまはく啓益はまに婦
 人壽草や子書とまはくく世小おこはるは
 あはれ小はくくにあつたる書なる人をまはくくはく

や家族のこゝろして強ぶらう小幼人梓小らま
るまそ世少そ小そておとく育草ふび
ありて裔乃いこ孫瓜融乃けり清じま子
成らん事終れらんやとてふれとと
はわくくかくれものぢりり

元禄十六癸未歳仲秋日

筑前植木逸民香月五平子秀房書



小兒必用卷之四 育草卷一

目錄

- 一 小兒書育乃總論
- 二 誕生乃説
- 三 児子生まそく即時子用茶餅の説
- 四 児子取擧げ柄の説
- 五 胎帯と断乃説
- 六 産湯乃説 甘ち子浴はる此説

七 乳付乃脱 甘ろ 乳母とりのりとの摩ここと
いの脱

八 甘き子乳と脱しり乃脱

九 乳母と脱ぶの脱

十 乳母乃痛よりく父子やゆひと甘き乳の脱
甘ろ 乳汁甘き時用茶剂の脱

十一 小兒夜脱乃脱

十二 産衣の脱 甘ろ 振袖乃脱

小兒必用養育月草卷一

牛山翁

香月啓益

後纂

一 小兒書育乃總論

凡人乃親れ子と養ふは事や道理乃自然に之をあえ
くあそくは事なりもあはれよき事なりあくも天子皇族
よの下にあやし此脱乃男賤乃女よは事なりひひのり
るる事なり一人は天地乃心き氣とつけて天と戴さ
地と隔く天地人乃三者と稱せし事なり此脱乃長
れはりとのりたる事天地乃横さぬり海をさけて頭ハ
横さむの是ハ横さあゆむと生れ出て月日と経る乃後ハ

抱さるお別せしてその親子より申とてたてぬる獄
 せらるるひとのかきりやねの鶴丸業よりなき外務の
 おまゆ一紙もあつてもうらふ子といはれぬあの子は生
 先とてそよとておや一とて老のほとを喜ぶんとはもあ
 びきりよりなき恩を乃りたふとて侍申とておせびして
 おはたのちまひく人乃親とてく其子といつて
 ざりせんやいふ一乃お人慈幼とてくお養乃ひつと
 ち終ふぬある事よぞ生く子乃親子十男子と治るると
 も一婦人と治るるく十婦人と治るるとも一小兒と治る
 かの一せあるく小兒乃療治は大人よりむつりき
 業より定まるる事なりといふやせ乃人醫れぬ理とて

らねば親子とて教育は業よりく申もされぬ
 一かぢありれむぎ申をり益つぬよひのりきと
 とあげく教育乃るようとき人とてはとぬいよ本と極る
 と見よ分す乃苗と極くその本はよあふはもぞ乃時と
 よく培い水そぎ出候やど乃りひりなきやうあ
 るその芽とてぬるにんと付く二三人もぞもぞ
 てぬれぬぬらぬ抵りてもそ本あつて合抱りぬの
 本と移る一寸けり二三人はぐけ内とよくそ
 ぶ時合抱りぬの本と移る勢あつても幹や枝や
 せく何乃用もなきごころあつて二三人とまもむ
 一く枯落するがごとく一はむ八百里乃根も一寸乃時と

よく厚くおのほくお年じき操とありはー七尺乃
人をもえたり時とくそだくねく百半乃壽とある
川半とあるとあり

二 延生乃説

○父母の合しとてこれお精子宮よ一月ハ珠露はび
とて、を形きと一圓水乃露れまよゆりあはれ本実乃
初とむすお時とるの也とる水りるがぶとて二月ハ桃花
のぶとてとてすうとてとてとてとてとてとてとてとて
夜よりできとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
夜と預よいとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
おは時ハお申より字甲といふとてとてとてとてとてとて

字甲とハ種つお乃とてとてとてとてとてとてとてとてとて
まハ種衣ハとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
から下とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
おとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
父母乃一とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃外とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
りてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
月ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
つる五月よとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
竅函ハ 洞竅とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
伸屈するもとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

胎前の二つの定と 八月は其魂ありふ九月はハニ成るを方と執
 合く九竅とらふ 十月は其氣をうけけるを之なり十月は十月の目
 みつる時ハ胎子受れ成るかぶくけりて子宮をお
 こりちるをとりてめくせしむるをまことと分曉の時
 とし分曉とハ和訓とねむかきとよみく本實に熱
 て肉と核ととこれとあそかしく又ハ胎乃熱しとあ
 づく帯れ成るぶと母乃胎肉ととるれくせれ下
 るなり

○胎子母乃胎肉とせくせむる時それハのうちに穢毒と
 しく穢毒とハ胎肉乃けがれる悪汁とて胎子乃帯れ
 子志とてハ母乃帯れけがれる胎肉乃けがれる胎毒ハ胎肉

うらまがれ後ハ胎子乃穢毒と移りけり生を下のとてそのす
 頼りる穢毒を指しよまきくは中子ぬくむおろけがれる悪
 汁とぬぐひ去へし切れぬくまれの胎毒ハ胎子と
 保嬰撮要といふ書よるえり

○五隠君乃流し胎子生れよまき帯れと待どりて
 中の耳草乃汁は縮といふ指とけりみく舌下れ
 帯られる悪汁と拭い去へし胎毒乃病とせせとい
 へりは法とせよハ胎子生れよまき母乃耳草乃汁とみ
 耳草乃布れ葉袋よ入くまきりて胎子生ることをのめ
 け薬袋と熱湯よいり汁とせりてよまきりて胎子
 とくは中とぬぐひし切れぬくする事と後日本小

てはいま一いふは傳はるべきを産婦は其を氣をいへり
 四子ハ收養わが子とすは打まうせく是よりいへり
 ひもまゝに常々口中に穢なる悪汁を咽よはるるに
 まぬく胎毒乃病とまぬくは益帯あまはあつらふ
 中花乃ぶらゝ四子生まれ下るるに口中と拭法と
 用は甚益なり一は世と日本は風俗はなごうはんと
 あり産婦ある家より産むるはは世とまぬくは
 心あらん人いふが志とけきく世はあはるるは
 博愛心鑑といふ書は四子母乃胎内はあつらふ母との
 子と仰くしその年及とまぬくは眼と鼻は口は
 いづくれ申すはいんぞ胎内の穢なる悪汁を飲す

あゝんやと及くしり穢ははらわらざるなり
 すてはを挽くくろるなりと四子宮とまぬくは
 いりてはんや口とむくくろ理ある生まれたる時
 ハ穢なる胎毒ととく之飲むとあらはまぬくは
 と拭ふはうき穢れはる悪汁なり又生まれたるは
 だ乳とのせぬはとまぬくは穢毒と通ぶるとまぬくは
 胎内乃穢毒ととむくは胎内乃穢毒と通ぶるとまぬくは
 三 四子生むる即時は用は薬劑乃穢
 〇四子生むるは黄連乃法と用は黄連二分
 甘草五分 縮ははくは或ハ乳乳及狀は黄連はうら
 熱湯はひるしあつと用ははる穢毒と吐きとかり

かくはあそくせざれば此毒がれたる毒を胸腹に開き
その日月と強さよきこころの病となり或ハ熱毒
瘡癤とせしむるハ胸面は瘡癤本々寒熱とせし
あまきと胎毒といふと集驗方といふ書に載り
和信胎毒ぬきとせしむる瘡とせしむる胃と載り
とくやとせしむる

○日本乃國風中使使子生をこころの毒を瘡癤とせし
法を用るなり依はあまきのこころの法款を根か
くりおらざるに耳なまかざりといふ或ハ蜂窩あざり
とくろく瘡癤といふ或ハ乳癰の状にせしむる
此は中使使子生をこころの毒を瘡癤とせしむる

どもとせしむるはあそくせざれば此毒がれたる毒を胸腹に開き
その日月と強さよきこころの病となり或ハ熱毒
瘡癤とせしむるハ胸面は瘡癤本々寒熱とせし
あまきと胎毒といふと集驗方といふ書に載り
和信胎毒ぬきとせしむる瘡とせしむる胃と載り
とくやとせしむる

○使子生をこころの毒を瘡癤とせしむる

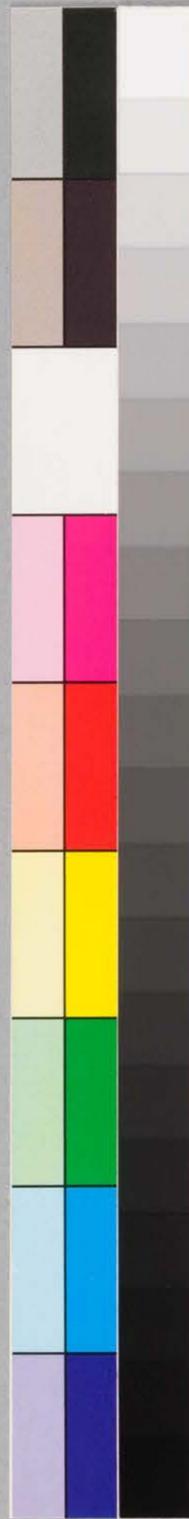
つりけ紙燭とつり紙燭とをきよむにねりかむくぬ極
しく胡麻の油をいじむ一紙燭として用ひきく赤水玄
珠乃流すハ紙燭より燭切欠子乃え字懸く後子米
醋と熱くしく肺葉を焼目と流す一見秘方なりと
見たり 常には中とらるるく験とりて中一
ぬ

五 肺葉と断り流

○肺葉と断り流竹筒を用へ一織乃又把と用へくは
輕なる箱中肺葉と付く或ハ單乃縮よまたく齒
て齒齒べ一長切し志し中を短くせり生金子乃
是掌 是乃割乃長よりるく断べ一長まれば外より

風とれをひく短まれば内蔵府と破る肺葉は内
蔵と生むる事すくられあるに連に拂去べ一志くご
れハ腹子へく病とあると且徳君の流し入る

○本邦乃風習をせ收結ありハ流せはる前よ生れ流
きよすよく又ハ巴季指乃長よりるく肺葉と
断るる 肺葉は肺葉と断り流すよの病はよく
す法と定やく断きよと紙燭とせきびく強く丹
中て切断べ一取肺葉と断り流す縮よても
ねる乃紙とよく標て焼く二重にけくこ糸とよきび
くもたく産傷とるよくし中れおとくせされハ水煙の
氣肺葉は断自より入るく病と生むる事あり



○五陰君の鏡子生まれ子と云ふ湯は猪腰汁がむり
いれく流さぐし瘡癩と生むる事なりと云ふ猪腰
汁とぬたのきもけさるりの和儀猪の字をあやまりて
ぬのあくとぬゆる者ありぬのちくは本草は野猪と
のせり猪とむりぬけ事なる生む子乃鏡子生
子とありふく五木乃湯とぬへ一木と一木槐榆槐
柳とありありと云ふ 考益 柳は子け事 本邦ゆき
るゆふよりとよいぬくせさばとさなるはれき共を
月此風俗をまねたりと云ふんを中祀とすする事と
いハその考益とも考益をみたりより事そのわらぬん子
いハ母乃胎心と知しいさむ日乃め何れぬともいぬ何れ

を薬湯のきよきそくはぬりく高と生むる者あり
常は湯を用くはふへし薬湯と南中とられ十餘
目と強くは薬湯を洗ひる也
○生む子け流し初きて生まれ方児子と云ふ事乃白子
流さる事ハ儀禮乃定むる所ハ何れ生む子産物なり
病ありハ目教子切りては十餘日とすして後流さるしと
云ふとぬれハ中流さるは生む下く必ず三日めとすして
流さる事定むる儀禮と云ふなり 本邦近來ハ儀禮
ハ生む下くそけり取擧ぐ流さるなり 輪茶抄と考
あるは初生の小兒流さる吉日と載せ也 和蘭乙未 納
平丁酉或ハ寅申は未乃日と云ふハ東流流と流く用

と云く、いりあまはよりく、いれが、本邦を治まれば、
あるとそむく、治らると争ふも、いふ、治らば、治らば、
れの時、よりしき、にき、にき、にき、にき、にき、にき、
よりく、生れり、そのま、取、取、取、取、取、取、
り、その、或、或、或、或、或、或、或、或、或、或、
病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、
と、す、ら、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、

○魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、魯、
その、背、と、背、と、背、と、背、と、背、と、背、と、背、と、
われ、と、背、と、背、と、背、と、背、と、背、と、背、と、
ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、

と、い、背、よ、あ、下、も、一、き、その、湯、腹、と、も、む、と、ま、
盥、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、
取、り、あ、一、き、中、を、ま、し、中、始、く、治、す、時、の、ま、あ、
生、治、す、時、の、ま、あ、と、付、き、中、を、ま、し、背、に、宗、皇、帝、と、
す、の、背、に、宗、皇、帝、と、付、き、中、を、ま、し、背、と、す、の、事、と、
れ、と、命、と、背、に、宗、皇、帝、と、付、き、中、を、ま、し、背、と、
先、治、す、時、の、ま、あ、と、付、き、中、を、ま、し、背、と、
中、を、ま、し、背、と、付、き、中、を、ま、し、背、と、
し、初、生、り、兒、子、と、治、す、時、の、ま、あ、と、付、き、中、を、ま、し、
き、ち、り、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、

邪病一色をさるる序花を十日に一色ん宛洗ふ
 本邦此風俗二目二目は一色んあり又い毎日
 洗ふ父子此意をこれ皮膚層薄くあり風と引合
 十日とありぬぬい父子の熱のほよよのゆて瘡
 痛を生んる類二百三百ありあひくよ一帯子父子
 又浴する時股の付根又い服の下をどと念を入く後ふ
 べきなり

○澄治準純は父子と洗ひく及朱粉とよりぬる或い
 牡蠣粉とよりぬるべくとてたり 砒石 柿 漆
 と同じバ中父よりく肌を出とす一氣と守るる事
 あり牡蠣粉或い昔粉又い天竺粉とよりぬるるなり

一物此おとすれは夏に瘡癩を生せぬいづれも粉
 と油を細くしぬるべし父子の皮膚の理にはな
 じやいりるをば葉末の粉とよりぬるるはけく
 さらありくろあおぬるく瘡とあるものなり又父
 よりく腮の下に股の付り腸の下をまてけを
 出たあるとよしのふありぶとく流させく天竺粉牡蠣の
 粉を敷とよりぬる或い碾茶とよりぬるもよきなり
 ⑦ 乳付乃後付ち乳母とめけいひ磨くはあ
 ○生也子取奉て治右き云粉又いぬる綿と襪
 一色く風月と入るるは夏の時よりすも衣類よりぬる

人乃懐子抱ふべし扱一族乃中生も又ハ穢染もも
家人もも子とるく産く子孫盤島くく女中の
乳のあるとえびも懐中子抱くも産く乳とのせ
えびし産くと乳付らんといふるも是本邦乃風
俗なり

○日本紀と揃ふる子他姫婦と用く乳とい皇子と養
まの侍ふき世中子乳母ととりく乳と書乃産なりと
つてより 略益 扱ひり子他姫婦とい玉依姫といふくより
皇子とハ物取書不合尊乃事すなり海神乃出女
豊玉姫乃産せ給ふなりその時豊玉姫乃妹玉依姫
婿乃君子娶りて皇子子乳と書く給ふけり世中子

乳母とのれくいの中乃因縁るまめれくハ女乃事く
ぎや産れハをき神代ハ乳付らん人と用ひる事
くく因乃皆曰き因縁りなりや

○東澄子武衛 源頼朝ハ誕生ハ初乳付らん其女とめ産
摩くと身引くくより 略益 扱ひり子今時を乳母と産
こやりの都生ハいとい 実東又ハ産業方ありハ
事乃頼朝乃産くより云始なりや産ハハ
と訓ぐれハ其女子とてさよりて育子とハ産く
いふや又小兒乃食と於群たよまといふ乳ハ小兒乃
食られハもやといふべし

ハ生れ子乳と飲くも乃況

○初生の子乳を吸ふは申す下くよりさ時
 ぐりぐり後乳付の人乳を飲まじ下くよりさ
 密葉又ハ黄蓮其草を汁と吸ふはけれり
 初と吐き出さくより生るは初生る小児乳
 と飲まじより子まれば胎毒とありしと愛ぶく事
 病と有りく事

○子金方アムン初生る乳子乳とて飲まじ申す
 くれ申目又ハ一日ぐりぐり後飲まじ下く
 いかりとてぐりぐり後飲まじ下く
 是天理の自然にれバ母の乳汁出る時と
 じ申す自然るる理なり本邦もその國の

凡依子より母の乳出たからハ密葉やどと吸
 たる他人の乳と飲まじはら母の乳を飲
 育んてなまりてまきまき乳房よりと
 こや平ぐりり女子は吸まぬ生る子も吸
 二三日と待たせと感へするは十日ぐり
 ぬる乳出るより母の乳を飲まじはら
 育つべきなり昔涼る我強身弱時小
 まよひぬりハ母腹破らるる子深
 終る子乳付乃母乳母ぐりりわを
 ぐりぐり身別へ去るるをわをば
 と用ぐりて母の乳とて申すは

ちくちく人どくわ所がは家内賊たきる人けり云
 産母病む乳汁も潤沢なり母乃乳と飲ふを去
 子申己理る自給をせむなり申ふ人し産人をも
 教も凡子と産一く六法母と可りものと撰んぐ
 子と可り育んぐしとてたり法母とい衆妻の事多
 とはせり日本生に法高女房を立りて申ふも乳
 母乃事といふ可らる者とい人柄のうさといちりこれ
 まもれど中花もいし一母の乳とい書育せし事を
 ちくしと時乃入りは理とゆくく母の乳とい書
 育せしむりて物縁うくく人柄よ此女乃可なり
 かりと撰び乳母のぶくち凡子と抱かぬてなりと

ちくちくは去りて母の乳とくると飲むべし切れどく
 どれい三年め四つちよそのはくけり子と産ましく母も
 病むくしとより一極る子産婦をすくやん乳を
 潤沢なる者乳母とてけし其乳と飲まぬと云わく
 母の乳と断され血脈は入しとて之形毎本懐妊と
 ちくしを身そとくさ法の若しとてけり産るは
 ちくしの子乳とらに乳るそのぬしその上生る子と
 産弱ひく病むしとい人や家賃一く賊なり此
 人の産文母乃乳と飲しとく書育んぐと事なり
 産せたと時乃人いさく懐胎の中を身抱あきん
 産るの時之をよりく血も脱く或い難産の

小児心算言卷一

婦人ハ血氣女子不足するより乳汁を出さず
ケ松る人ぬ人を乳乃ゆるとすらく飲ためんてせむ子
とく飲乳をぶうかくれぬ乳乃ぬ人の乳母と推
ひくははひい兒子と養育たぶとる里一樂よ心
べうべ

九 乳母と接ぶる病

○除去前乃後ハ乳母と接ぶ申すゆめく大切なり
乳と飲と盛長しぬく深申す一きれば乳母乃生質
心根をもゆるゆゆるそのるまゝん血氣乃流さ
る事とやされと本と接よきまゝといつるは誤り
すも接よる其本かりく色ハ橋柱も疲るる事

本肥盛られハ橋柱もよく盛長する事なる事
○乳母と接ぶる事 ○第一病者けく色青白く皮膚
毛形體を憔悴する女 ○第二病臭ある女 ○第三代々
飛瘡ある女 ○第四身中瘡疥ある女
○第五又揚梅瘡ある女 ○第六瘧癘の女 ○第七瘰
癧ある女 ○第八癩癩の病ある女 ○第九音聲なる濁る
女 ○第十髪乃毛けくわき女 ○第十一耳聾の女 ○第
十二兔缺の女 ○第十三黧鼻の女 ○第十四吃の女 ○第
十五瘰癧ある女 其外五體不具の女 俗よよハ 是亦類乃
女と乳母と守るべきと満る醫者子裁ら
○司馬温公乃没子乳母とるふ事切らくしくすべ

乳母よびざれど家の法と成るものこよわらば其家の
 父子とくりし守りし業とくは乳母も似るるまじ
 一に戸とくまへり 日本めくも乳母と推ぶ事あり
 そふせびのくむせく其刃掛よく乳汁も潤沢なる
 女と推はんく乳母とすまの其乳母はくハ賤家より
 出る者ありて其性いさしくゆきまの事なき怒安
 一その上大切りる父子とくはる事と也は子とく事
 されど父母も其父要ある者よかりハ成る家ありハ成る
 一とくまよりくハいさなる者出まらば家の法と乳一
 ける能くわぬまじかり

○王肯堂の乳母ハ氣血を盛んすく乳汁潤

流りてそ生質よく者とくハ一乳母ハ常子飲食
 と性も色慾とけりふるは房事とすべしハ乳母の
 血乳汁と化さるるれハ一切の事性もさくまじと
 之を益なりハ 日本も富貴の家ハ乳母とえ
 らぶ事法のよく其つ一も法もよくちりまはるは
 子と其育も中々其法をその内或ハ生理よくき
 事多しハ人なれば乳母ハ多し裨濟する者ありて
 己が疾も在く此法は後といふもよく夜乳もよく
 養生ハ食物も黍粟むらと食事もよく存する者
 像は後つとく夜乳ハ綿絮も富て厚く室も暖く
 よりそ乳汁熱と生くハはく父子に害とらば食

外ハ青キヲ真紅ノ斑トシ先程更々程より人
 老乳汁ハ食申一より少く乳母より飽満るや
 せづれハ乳色出る事一とを食飲ハ七食を食リ止
 乳母ハつひも含乳ぬ乳母ハはよむるひく含乳一脾
 胃ノ充塞く張満ノ病となり或ハ中一き病となり死
 亡ノ事ある者一又その家によりく乳母ヲ殺一と雖
 ぬハ後化法を教へ平生ノ所為ぬをもとくわきや
 一くわきとく葉もいれ一くく悪きやどいひく乳母
 の疾子存る時や門く凡も字を馴ぬ葉となりりある
 まより乳母ノ葉一帯一帯く乳解西せぬとのづり
 乳も出ぬもの多一又その家よりけ遅るすことわき



之乳母のまはばつてくハ乳を吐ぬものなりと云く乳母ハ
 家の子を中つてせむるが乳とゆりせと和倍の儀よりハ
 かぶとく船歌の方ハ乳母人といふごとく家よりこころ着
 度ゆくをききその隣家乃小者部をとうけ也と云く
 故遠くく家の法と乳一欠子ともゆらそりありあ
 けいして不直は怪家と云く病付の事多くその上欠子
 乳母の事と鼻負一く多くハ乳母乃性子列く家より
 者もゆりあり全乳母ハ能く辨へる事や

○乳母集子乳汁乃色ハ白一白ハ乳ハ色を肺の
 乃るる而肺ハ人乃文字とるる乳汁ハ乳母の乳根
 乃ハ乳母と云き賦の始られハ其色白一と云く乳
 此ハ乳汁乃色ハ白きと貴ぶる全乳母と云くハ時を乳
 と云くせくを色と云く乳一色黄ハ一と云く濁る乳
 乃ハ必用の中れ能くゆりき事なり

○小重方乃乳ハ乳母健りの者ハ乳乃出来の中くも
 粉極くよきと操ハ必能くするものありと云く操くその
 乳と云くしと後乳子ハ飲まじへしつハ乳母乳
 乳と飲まじの度毎まじゆ操くよ乳と云く用しこれ
 と病勢乳と云付く小乳子毒と云く乳と云く
 ○乳母乃飲食するりり乳汁と云く乳子と云く乳と飲ま
 せら不感意と云く乳子乃乳子乃乳と云く
 ○乳母乳と云く乳汁熱は定と云く乳汁乳

を乳の時熱一り乳と飲ハ小兒吐逆とらハ危壯時
寤ト一り乳と飲ハ嘔吐と生一疳積と患あるこ
○乳母怒りく乳と飲あひれ小兒よ一り一り乳
癩瘡の病とらハ

○乳母酒を酔く乳との白あひま小兒とて後痛

○濃乳の乳と飲あひれ小兒疲くと黄とこ腹とこま

脚痿一じ名付て魁病といふなり和倍とこつとら

とらふこ

○乳母同よあろく乳と飲一じま小兒とて後痛

吐逆とらふ

○乳母ねろり一あろく乳と飲一じれ小兒吐逆とらふ

○乳母食はらとこそのまの乳とあまのまハ色黄とこ瘰
の虫と生一は臭事とらふ

○乳母汗一くすのら乳と飲あひれ小兒疳積と生

○乳母温熱と含りて乳と飲一じれ小兒

胸毛背の病とらハ和倍といふなり

○乳母酸鹹食和或ハ臭る用の乳と含りて乳とあ

たゆれハ酒の病と生ひらと

○乳母酒を酔風と中く邪一酔くゆ乳と飲一じ

れら飲と一り一り乳と知りてらと

○乳母咳嗽ある時乳とのま一ひれ小兒とて後痛

喘痰の病とらハ小兒乳と飲とこくこく熱と

○乳母或ハ怒リ喜イ申シ定ラズ泣ク乳母のまじ
じれば涎と生シ嘔吐と行レシ

○乳母申申と行ク乳と飲レシ乳母と
被推ク脚弱ク行申遅ク行レシ

右ハ乳母乃身レツ一止而乃申申言レイテ乳と行
レ申サレレシとの況聖附注ヲ載レシ

○小兒大ハ小兒泣ク即時乳と飲レハ腹痛の
病を生レル事子哭ク乳との病ハ吐瀉と行レテ大ハ小兒

乳との病ハ腹痛と行レテ大ハ小兒泣ク乳との病ハ吐瀉と行
レテ大ハ小兒泣ク乳との病ハ吐瀉と行レテ大ハ小兒泣ク

と痙攣と生レテ家チ右ハ小兒乃身の病レシ
而の教チ申シとの病右ハ醫術切科準繩ホヤス
○小兒方子乳母小兒子と抱ク時トキハ己ガ臂月或抱
レテ小兒乃頭と乳乃乳となレテ乳と飲レテ
て寝テレバ小兒眠ル乳母も眠ル事トスルハ
ラズ其の乳と行レシ乳と飲レシ乳と飲レシ
飲ラズ乳母もあハテ一嘔吐の病トスル事ト
ナリ嘔吐とハ乳母の乳と飲レシ乳と飲レシ
小兒母も小兒も眠ル事トスル事トスル事ト
乳母も小兒も鼻と行レシ小兒も息と行レシ
乳と飲レシ乳母も小兒も抱キテ時ト

あるは乳母より乳を飲まぬは夜に乳を飲まぬは已が方え
きき乳を飲まぬは半多の乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは

十

乳母の病より乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳汁を出さぬ時用の薬剤の乳

○生の子に乳は乳母の乳に飲食と極しし乳母の
飲食するは乳汁と作る幸物難味乃厚物熱は
よき肉食油氣酒の類といひしは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乃脾胃は熱生じて乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは

といふは乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
よりの乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは

○乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
あり乳母の乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは
乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは乳を飲まぬは

母は薬と服せられざるは乳子に後び者と思はれり
者も一しは乳子の乳子に薬と用事と始ふや
ひわりの薬と服せざんは病いりて愈へき病愈
んばよく乳母気苦しく乳の出り時めくは和信
の後よりいりては乳の乳れわらうと物を用
そゝぬそよりりてよよふおれはくすけり乳と
のますれども食いとけりきり疲つねく病と生
びりたり居てはつていりる

○乳汁出たは時と和信者にははしりて本薬より
く出るはけりる和信者にははしりて本薬より
乳奥一は焼細末一錢用とるはしりて
乳汁出たは時と和信者にははしりて本薬より
酒よても用くはしりて本薬より
乳汁出たは時と和信者にははしりて本薬より
乳汁と出らる中より乳汁と通じらる中より
乳汁と出らる中より乳汁と通じらる中より
乳汁と出らる中より乳汁と通じらる中より

○乳汁出たは時と和信者にははしりて本薬より
加減玉露散 當歸 白芍藥 桔梗 川芎 白茯苓
天花粉 木通 牽牛子 右八味各五分一服と
るはしりて本薬より

衫と用べしをいふ時にも衫子綿と入るるをいふべし
 和俗の事と布子といふ也 日本子綿の種と裁し申す
 桓武天皇延暦十八年子天竺良師人詔子漂浪く
 三河の生よ多くけ人綿實と持くまゝりて裁初しより
 日本國子ひらりしをいふと類後國史百九十九卷子裁ち
 申は申すも世に綿種と裁し申すとあひくは布よ
 りていふくまゝりしをいふ文祿初申の比又申はより徳永
 里日本中平りてく綿種と種へ本綿と織ちて布子繁
 入はさそきる申すぬはきとさるることすれどもいすも本
 綿と種と布子といひ綿といふ綿といふもやぬぐくは
 乃きれぬぬりたる本綿と云ふべしつるもよき糸ぐく

き袖といふしげきももぬわけりてきと一じとさるる
 或は冬月の生れ子或は之を産職なる小兒はぬくはき手
 子産ぐこ一ありき産と有るもよき本綿はぬく小兒も
 らりく氣とさむはぬりるすとよく小兒の襦袢尻者の
 ぬく布はても本綿もよき一尻者ともいふもよき
 大小使の襦はぬりるをいふべしとありたり襦袢の腹腰の
 わちりまとも申す一をいふるは尻つよ産とすそのけ
 けつて産名産と有りく乳母もその産とさるるをいふ
 けつて産記ありその有り産と付くといふる也
 ○小兒も衣類と云ふを記はぬく戸障子といふまより
 襦とぬりく火と燃し温かしくして云ふせぬべしと

99
1182

小見の神話巻一

三十八

かけけりしは後かゝるや又小見を日乃神と云ふく月の
 ましむるんやまほくく同音と云ふて勢つゝは
 ま友の腋とぬいさうてそ勢とさうけしむるまのや
 物にけ理とゆきぬ人小見の衣張と云ふも風と
 やりとも神と短くぬいはぬく襦袢と名付或ハ河蘭
 泥肌をさうして肌はまきしむられ勢と云ふこゝろ
 をさびと云ふいふも又と付ぬ人小見の神
 はまきの風流のこけりぬけられぬと云ふり
 もく年なほゆきなり神とまきしむるもその神と
 けさうてまきしむる小見はけまきしむる神と
 く嫌と云けて神はまきぬる一勢と云ふる

三十八